

ドストエフスキ研究会便り（26）

- ★『カラマーゾフの兄弟』が、人間と世界とその歴史を貫くものを「光と闇」・「信と不信」・「肯定と否定」という極性の分裂として捉え、この両極間で展開する人間ドラマを具体的にしかも激しく描き出す作品であること、そしてここに登場する数多くの人物たちの中でも、ゾシマ長老が分裂を超えた「光」と「信」と「肯定」の体現者として描き出されること——このことに我々は深く心を打たれます。

- ★またこのゾシマ長老を師と仰ぐ青年アリョーシャが、ゾシマの死後、師の遺訓に従って直ちに修道院を出て、地上の不条理と運命の醜悪さと悲惨さ故に、神とイエスを弾劾し否定する異母兄弟イワンやスメルジャコフたちと正面から対峙し、「闇」を「光」に、「不信」を「信」に、「否定」を「肯定」に転じさせる「実行的な愛」の「戦士」として描かれること——このことにも我々は強く心を動かされます。

- ★しかしゾシマ長老が、そしてアリョーシャが表現する「光」と「信」と「肯定」の精神とは、そもそも何であり、それは何処から生まれ出るものなのか？——改めてこのような問いの前に立たされると、我々は途方に暮れてしまいます。たとえこれら師弟の「善良さ」に着目し、それがキリスト教世界、殊に旧約・新約聖書の世界に根を持つものだと見当をつけても、二人が表現する「光」と「信」と「肯定」が具体的に如何に生まれ出てくるのか、説明するのは容易なことではありません。

- ★『『カラマーゾフの兄弟』の「光」について』と題した本論は、この作品の光源を旧約・新約聖書の世界、中でもドストエフスキがその創作の核としたイエス像とその十字架にあると見定め、そこからこの作家が人間と世界とその歴史、更には超越世界について如何に理解し、それを如何に表現したかを検討することで、彼の思想世界の基本構造を浮き彫りにしようとするものです。殊に今回は、ゾシマ長老からアリョーシャに連なる光の系譜の出発点として、これら師弟の内に生きる故郷と母と祭壇・教会・修道院の思い出を辿り、二人の宗教的意識の目覚めを確認します。

- ★この論考は、コロナ禍による中断を挟んで、五年前から親鸞仏教センターで若い気鋭の研究者の方たちと続けられてきた研究会（「親鸞とドストエフスキ」）に於いて、私が発表させて頂いた考察を核とするもので、それを改めて論文化し、ここに掲載するものです。研究会と並行して、掲載は今後数年がかりになるかと思いますが、皆さんがこれを「叩き台」とし、ドストエフスキがその遺作に於いて我々に提示した「光」について、改めて考える機会として頂ければ幸いです。

『カラマーゾフの兄弟』の「光」について

(その1)

— ゾシマ長老とアリョーシャ師弟が表現するもの —

芦川 進一

目次	ページ
[1]. ゾシマ長老に関する基礎データ	
— 今までの私の論考 —	3
[2]. ある家族の歴史	
(A). モスクワのアリョーシャ	5
— 様々な性格規定、それらが向かうベクトル —	
(B). アリョーシャの帰郷(1)	7
— アリョーシャの幼年時代と母 —	
(C). アリョーシャの帰郷(2)	9
— 修道院、夕日の斜光、「一切かニルーブリか」 —	
[3]. 故郷・「家畜追込町」で(1)	
— 父フョードルと「ロシア的信仰」 —	10
[4]. 故郷・「家畜追込町」で(2)	
— ゾシマ長老との出会い —	12
アリョーシャの炎(1)	13
アリョーシャの炎(2)	15
[5]. 『ヨブ記』に書かれていたこと	
— 少年ゾシマの教会体験 —	17
[6]. アリョーシャ、そしてスメルジャコフ	
— 「光」と「闇」、極性の分裂への視野 —	20
次回・「ドストエフスキイ研究会便り(27)」について	23

『カラマーゾフの兄弟』の「光」について

(その1)

— ゴシマ長老とアリオーシャ師弟が表現するもの —

[1]. ゴシマ長老に関する基礎データ

ゴシマ長老について考えるにあたり、まず『カラマーゾフの兄弟』に於いて検討すべき10のテーマを、それらが記された作品中の場所と共に列記しておこう。

- [1]. 第1篇「ある家族の歴史」・4-5章・・・アリオーシャ、出家から帰郷まで
- [2]. 同上・5章・・・ゴシマ、その名声と「長老制度」について
- [3]. 第2篇「場違いな会合」・・・ゴシマ長老の草庵にて
 - a. 2章・・・フョードルとの対決
 - b. 3章・・・信仰心の篤い女たちとの対話
 - c. 4章・・・信仰心の薄い婦人との対話
 - d. 5章・・・イワンとの対決
 - e. 6章・・・ドミートリイとの対決
 - f. 4・7章・・・アリオーシャとリーザ、アリオーシャへの遺訓(I)
- [4]. 第4篇「ナドルィフ」・1章・・・ゴシマの訓話「修道院について」、フェラポント
- [5]. 第5篇「プロとコントラ」・3-5章・・・「叛逆」の異母兄弟、「大審問官」
- [6]. 第6篇「ロシアの修道僧」・1-3章・・・ゴシマ最期の夜、「ゴシマ伝」
- [7]. 第7篇「アリオーシャ」・1-4章・・・ゴシマの死と腐臭、アリオーシャの回心劇
- [8]. 第11篇「兄イワン」・3章・・・小悪魔リーザ
- [9]. 同上・6-8章・・・「父親殺し」異母兄弟の対決、「悪業への懲罰(カラ)」
- [10]. 「エピローグ」・3章・・・少年たち、アリオーシャの旅立ち

我々はゴシマ長老を考えるにあたり、テキスト上の基礎資料が、取り敢えず上記[1]-[10]の十箇所にあると見定め、これからそれら一つ一つを検討してゆきたい。しかし[3]には多数の重要なテーマが含まれており、扱いは一度では済まないだろう。[8]や[10]は、ゴシマ長老との直接的な関係を見出し難い。また十箇所の内にある様々なテーマの検討・考察も、必ずしも順番通りにするのが適切とは言えず、それら全ての検討は「行きつ・戻りつ」を繰り返しながら、相当長丁場になることが予想される。それだけドストエフスキイは、ゴシマ長老の存在をこの作品の各所・深部にまで浸透させていると言えよう。

それらのテーマについて、筆者(声川)は今まで『カラマーゾフの兄弟論』を始め、河合文教研のHP・「ドストエフスキイ研究会便り」に於いて様々に考察を試みてきた。それらの内、今回扱う[1]、モスクワ時代のアリオーシャの成長史については三つの論考があり、

それらで扱われたテーマは、今回も改めて検討する予定であるが、時には簡単に纏め直して紹介するか、掲載箇所を指摘するだけとなることも多いであろう。関心を持たれた方は、指摘された箇所を以下で参照し、問題となるテーマについてお読み頂ければと思う。

今までの私の論考

『カラマーゾフの兄弟』に於いてゾシマ長老に関する情報を記すのは、基本的にこの小説の筆者である。だがそれらの多くは主人公アリョーシャの視野とも重ねられる形で与えられるところに特徴がある。我々の考察も、まずはアリョーシャに焦点を絞ることから始め、そこからゾシマ長老に向かうという手順を踏むことが多くなるだろう。

この作品の舞台となる「家畜追込町」（この名前の象徴性には注目すべきである）、その町外れにある修道院で「キリストの御姿」を守るゾシマ長老、このゾシマについて我々が具体的に知るのには、アリョーシャの「成長史」を通してである。つまり四歳で母に死なれ、父からは「忘れられ棄て去られた」アリョーシャが、奇特定の庇護者たちの許で育てられ、最終的に親切な二人の婦人の許を去り、19歳でモスクワから故郷に帰り、町外れの修道院でゾシマ長老と出会うまで——この作品の主人公が如何なる天性を持って生まれ、如何にして帰郷することになったのかについて、この小説の筆者は「ある家族の歴史」と題して、作品の主な登場人物を紹介する第一篇4-5章で、的確かつ丁寧な筆で描き出している。（小説の「筆者」が誰であるかは問題だが、取り敢えず我々は、これを作者ドストエフスキ自身と考えておいてまず問題はないだろう）。私自身『カラマーゾフの兄弟』と取り組む際には、常に今までの知識を一度棄てたところで、この第一篇と向き合い直すことにしているのだが、この4-5章についても繰り返し検討し、以下の三つの論考を記してきた。

1. 『カラマーゾフの兄弟論 — 砕かれし魂の記録 —』前篇・Ⅲ・2-3

（河合文化教育研究所発行、2016）

本書は『カラマーゾフの兄弟』に於けるキリスト教思想の在り方を総合的に検討し、登場人物の一人ひとりがその「魂」を「砕かれし」先に、如何にイエス・キリストと神との出会いを果たし、魂の再生を与えられるか、そのドラマを追ったもの。アリョーシャについても、この書の前篇Ⅲに於いて、彼の婚約者で「小悪魔」たるリーザとの関係に光を当てつつ、ゾシマ長老との出会いに至るまでの、モスクワに於ける彼の宗教的成長史を辿っている。この『カラマーゾフの兄弟論』との取り組みの過程で試みたデッサンが、次の2である。

2. 「アリョーシャとイワンの聖書 — モスクワ時代、イエス像構成の一断面 —」

（早稲田大学ロシア文学科 HP (<http://apop.chicappa.jp/wordpress/>)、2014）

（河合文化教育研究所 HP (<http://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/>)

「ドストエフスキ研究会便り(3)」、2015）

モスクワ時代のアリョーシャとイワンを造型するにあたって、ドストエフスキが如何に

福音書のイエス像に焦点を絞ったかを、聖書学の基本的概念を説明しつつ検討したもの。本論では、次の3にも記したが、モスクワ時代のアリョーシャの成長史を「小さな成長史」、彼が故郷の家畜追込町に戻り、ゾシマ長老の下で修業を開始してからのドラマを「大きな成長史」として、「成長史」という視野の下に、この青年の宗教的認識の深化と覚醒に向けたドラマを捉えようとした。アリョーシャの兄イワンについても、同じような視点から考察を加えている。

3. 「アリョーシャとイワンの聖書 — モスクワ時代、イエス像構成の一断面 —」

(河合文化教育研究所 HP、(<http://bunkkyoken.kawai-juku.ac.jp/>))

「ドストエフスキ研究会便り(21)」、2021)

上の2を土台として、新たに「註」と「付説」とを大幅に加えた改訂版。新約聖書学の基本的概念を更に詳しく紹介し、ドストエフスキ世界に関心を持つ若者が、如何に彼のキリスト教思想に、聖書テキストに即しつつ、アプローチをしたらよいか、その方法について説明を試みたもの。私自身がドストエフスキ研究の基本として用いてきた方法である。

「註」と「付説」では、新約聖書学の第一人者G. タイセンが打ち出した「放浪のラディカリズム」の概念について説明を試みた。これは原始キリスト教会の生成を担った「巡回霊能者」たちを支配していた精神エートスが、①家族を捨て、②財産を捨て、③故郷を捨て、④自己防衛の手段を捨てて、⑤時代を支配する「ア・ノミー(無規範)」のニヒリズムに対して、「愛と赦し」の精神を説き生きるというものである。この原始キリスト教生成を担った精神エートスが、『カラマーゾフの兄弟』に於いて、イエスの呼び声に応じて出家をし、「神と不死」探求の旅に乗り出した青年アリョーシャのそれと驚くほど重なることを指摘した。その上で、殊に最後の「付説」では、福音書記者マルコが描くペテロと、ドストエフスキが描くアリョーシャとの、大小二つの「成長史」を対比させ、二人のイエスとその十字架に関する認識の深化と覚醒に向けたプロセス・メカニズムの比較考察を試みた。

ドストエフスキが描くアリョーシャの成長史と、マルコが描くペテロの成長史 —— 私はこの「成長史」という視点が、我々人間が迎える宗教的認識の深化と覚醒に向けたプロセス・メカニズムを考える上で、非常に有効な「思考の基準枠」(frame of reference)だと思っている。今後ゾシマ長老とアリョーシャに関する考察に於いても、これを重要な「思考の基準枠」として繰り返し取り上げてゆきたい。

[1]. 第1篇「ある家族の歴史」・4-5章

(A). モスクワのアリョーシャ

— 様々な性格規定、それらが向かうベクトル —

モスクワに於けるアリョーシャの「成長史」について、改めて簡単に纏めよう。我々はここに、ゾシマ長老からアリョーシャを貫く縦糸たるキリスト教思想の出発点が、言

い換えれば、十字架に極まるイエス像について主人公アリョーシャが認識を深めてゆくドラマの布石が、作者ドストエフスキイによって周到に配置されていることを確認出来るであろう。アリョーシャの、いわば「小さな成長史」である。

注目されることは、筆者がまずはアリョーシャの性格を実に様々に規定していることだ。それらを箇条書きにしてみよう。

- イ. 神秘家・狂信者ではないこと。(このことは再度記される)。
- ロ. 駆け出しの博愛主義者であること。
- ハ. 信と愛と赦しの人であること。
- ニ. 決して他人を裁かず、非難をしないこと。
- ホ. 他人から愛される人であること。
- ヘ. 異性・性への極度に強い羞恥心を持つこと。
- ト. 金銭や生活について決して思い煩わないこと。
- チ. 健康で均整の取れた体格を持った美青年であること。
- リ. 瞑想的で物静かな落ち着いた青年であること。
- ヌ. 現実主義者であること。(「信が奇跡を生む」と捉える人物であること)
- ル. 真理を求め、偉業のためには命をも投げ出す「現代青年」であること。

これら数多くの性格規定と、それに因んだエピソードを如何なるベクトルの下に整理し、アリョーシャという人物像を如何に築き上げたらいのか？ 我々読者は『カラマーゾフの兄弟』第一篇を一読して、まずは途方に暮れさせられるか、逆にそこから、例えばアリョーシャはイエスだというような恣意的なアリョーシャ像を造り上げてしまうか、或いはそれらを漫然と読み散らしたまま次篇以降のドラマに進んでしまうことが少なくない。だが筆者は、これらのデータを纏め上げる基本的な「中心軸」とも言うべきデータを我々に提供しているのだ。即ち筆者は、アリョーシャが高等中学校での勉強を一年残し、「出家」を志したという決定的とも言うべき事実を提示しているのである。しかも筆者は、アリョーシャの出家の動機を二度にわたって、ほぼ同じ表現で説明する。

「その時、そのことだけが彼に感動を与え、俗世の憎悪の闇から愛の光に向かって身を引き剥がそうとしていた彼の魂の、いわば究極の理想と思えたからである」
(『カラマーゾフの兄弟』第一篇4・5章) [以後は(4・5)のように略記する]

「俗世の憎悪の闇から愛の光に向かって身を引き剥がす」—— この「出家」の決意という事実によって、筆者が様々に提示したアリョーシャの性格は一気に一つの視点の下に収束し、この青年が生来の「信と愛と赦し」の人と記されたことの真の背景も明らかとなるであろう。つまり筆者が描き出そうとしているのは、この青年の宗教的認識の深

化と覚醒に向けた魂の成長史のドラマなのだ。

更に筆者は、この出家の決意と呼応すると思われる出来事、アリョーシャの内面に起きた一つの決定的な出来事についても報告をする。「偉業」のためには一切を犠牲にすることを厭わぬ「現代青年」とされるアリョーシャは、「真理」を求め、「真剣に思い巡らせた」末に、「不死と神は存在する」という確信に至って愕然とし、「自分は不死のために生きよう、中途半端な妥協は受け入れられない」と自らに言い聞かせたとされるのだ。「出家」の決意。「神と不死」の存在の確信。求道上の「中途半端な妥協」の拒否——続いて筆者は、この青年がイエスの次のような言葉と出会ったと告げる。

「なんぢ若し^も ^{まった}全からんと思はば、^{おま}一切を^{いっさい} ^{わか}分ち^{あた}與へよ、^{きた}かつ來たりて^{われ}我に^{したが}從え(★)」

★実はこの言葉は福音書の何処にも存在しない。福音書を自家薬籠中のものとし、常にイエス像の構成を試みるドストエフスキイが、如何にこのイエスの言葉を「創り上げた」かについては、上記[1]の私の論考1・2・3を参照されたい。

このイエスの言葉と向き合ったアリョーシャは、自らにこう言い聞かせたとされる。

「《一切》の代わりに二ループリを与えて誤魔化したり、《我に従え》の代わりに礼拝式に通うだけにしたりすることなど、僕には出来ない」
「そこ[故郷]では《一切》[を与えているの]か？ それともそこでも《二ループリ》[しか与えていないの]か？」

(一5)

「ただ然り・然り、否・否と言へ、之に過ぐるは悪より出ざるなり」(マタイ五37)——イエスが迫る、神を前にしての絶対排中律の精神に込め、アリョーシャは故郷・家畜追込町に於ける信仰の真贋を見極めるべく、愛するリーザの住むモスクワを去り、遂には故郷の町・家畜追込町の郊外にある修道院で、禁欲と沈黙と祈りの内に「キリストの御姿」を守るゾシマ長老と出会うのである。アリョーシャの造型を貫く一本の太い縦糸が、そしてそこから照射されるゾシマ長老の姿が、次第しだいに浮かび上がって来る。

(B). アリョーシャの帰郷(1)

— 母の思い出 —

出家の決意をしたアリョーシャ。この青年が故郷の家畜追込町に帰ることを決めた理由としては、彼が「母の墓を探すこと」を切望したからであるとされる。筆者によれば、アリョーシャの心には、彼が二歳の頃の或る思い出が強く焼き付けられていた——静かな夏の夕方、沈みかけた太陽の斜光が射し込む中、燈明が灯る祭壇の聖像の前に跪いた母が、幼いアリョーシャを両腕で強く抱きしめ、ヒステリーを起こしたかのように泣

きじゃくり、叫び声を上げながら聖母マリアに祈っている。母は聖母の庇護を求めるかのように、両手で抱きしめた彼を聖像の方に差し伸べる。そこへ突然乳母が飛び込んできて、怯えたようにアリョーシャを母からもぎ放すという光景である。この時の母の顔は「狂おしく」も「美しかった」とされる(一4)。彼はその後の全生涯を通じて、母の顔立ちやその愛撫を、まるで母が生きて目の前に立っているかのように覚えていたという。



「システインのマドンナ」

ラファエロ作、1513(?)、ドレスデン美術館

ところが実際に帰郷したアリョーシャは、召使グレゴリーイの案内で母の墓を訪れたものの、さしたる感慨を示すこともなく、その後はもう墓に殆ど関心を示すこともなかったとされる。「母の墓探し」——これがアリョーシャの帰郷の唯一最大の理由であったとは考え難いのである。実際に筆者自身、この青年の故郷帰還について、「魂から突然湧き上がり、彼を何か新しい未知の、しかし既に逃げようのない道へと引っ張って行ったものが何であるのか」について、「当時彼自身も知らず、説明のしようがなかった」と記しているのだ(一4)。余りにも強烈かつ甘美な母の思い出との関係から、また前ページに挙げたように、ドストエフスキイ自身生涯愛したラファエロの「聖母子像(システィンのマドンナ)」と結びつけて、アリョーシャの帰郷の理由について、専ら「母の墓探し」という角度から捉えられることが多いが、我々はこの立場からは距離を置く必要があるだろう。

(C). アリョーシャの帰郷(2)

— 修道院、夕陽の斜光、「一切かニルーブリか」 —

事実、テキストを注意深く追ってゆくと、筆者はそのすぐ後で章を改め(一5)、アリョーシャの故郷帰還の理由について再度説明を試み、「魂から突然湧き上がり、彼を何か新しい未知の、しかし既に逃げようのない道へと引っ張って行ったもの」について、三つの可能性を挙げているのである。それらを箇条書きにしてみよう。

1. 母に連れられて訪れた修道院の思い出が「何かしら」残っていて、アリョーシャの心に影響を及ぼした可能性 —— つまり「修道院の思い出」。
2. 「狐憑き(クリクーシカ)」の母が泣きじゃくりながら、彼を差し出した聖像の前に射し込んでいた夕日の斜光が、彼の心に作用を及ぼした可能性 —— つまり「夕日の斜光」。(先の思い出の描写に於いても(一4)、「夕日の斜光」が最もアリョーシャの心に残っていたとされる)。
3. 「そ[故郷]では《一切》[を与えているのか? それともそこでも《ニルーブリ》[しか与えていないのか?」 —— つまり故郷に於ける信仰生活の真贋の確認。

筆者は、実際にはアリョーシャ本人にも定かではなかったとしつつも、これら三つが彼の帰郷の理由として考えられるとするのだ。故郷の修道院の思い出。母に抱かれ聖像の前で見た夕日の斜光の思い出。そして「一切か、ニルーブリか」、故郷の信仰生活の真贋を確認しようとの意図 —— これら三つが指し示すベクトルは、ただ母に収束するものではなく、明らかにこの青年の内深くに宿された豊かで鋭敏な宗教的感性である。これは先に見たように、モスクワのアリョーシャについて、筆者が提供する様々なデータから浮かび上がって来た一本の太い縦糸、つまりこの青年の宗教的認識の深化と覚醒に向けた魂の成長史という、アリョーシャ造型への基本的視点の内に位置づけられるべきものであろう。

筆者が生来の「信と愛と赦しの人」であるとするアリョーシャを置くベクトルが、以上

でほぼ明確になった。筆者はこの延長線上に、帰郷したアリョーシャに母の墓を訪れさせた後、いよいよ町外れの修道院でゾシマ長老と出合わせるののである。

だが筆者は、アリョーシャがゾシマ長老の下で修行生活を始める前に、父フョードルと如何なる関係を結んだかについても丁寧に記す。ゾシマ長老をアリョーシャにとっての「精神の父」とするならば、フョードルは正に「肉の父」である。我々はこちらから、作者ドストエフスキイがこの作品を構成する「成長史」について、更に一つ新たな視点を得ることになるであろう。つまりアリョーシャがこれら肉と精神の「父」二人と如何に出会い、その先更に如何にして「天なる父」との出会いを果たすかという「神と不死」探求の物語である。更に言えば『カラマーゾフの兄弟』とは、幼くして母に死に別れ、父からは「忘れられ棄て去られた」兄弟四人が、その「小さな成長史」を生きた先に、新たにそれぞれの真の母と父と故郷を求める「大きな成長史」を生きる物語としてあるとも言えよう。だが話を急がず、アリョーシャは帰郷後、幼い時に彼を「忘れ棄て去った」父フョードルと如何に向き合ったのか？ まずはこの確認をしておこう。我々はそれらのデータが指し示す先にあるものが、やはりゾシマ長老の存在であることに気づかされるであろう。

[3]. 故郷・家畜追込町で(1)

— 父フョードルと「ロシア的信仰」 —

故郷の家で、アリョーシャは父フョードルと如何に向き合ったのか？ 筆者によれば、この青年は帰郷後、父フョードルの「放蕩の巣窟」で見ると堪えぬ場面に出くわしても黙って席を立ち、誰に対しても決して軽蔑や非難はしなかったという。フョードルはと言えば、この息子がかつて自分の愛した亡き「狐憑き(クリクーシカ)」の妻と瓜二つであることに気づき、やがて彼を「天使」と見なすようにさえなる。飽くことなく酒と金と女を求める生活によって、彼の内で遠くの昔に萎んでしまっていた「何か」が目覚めさせられたのだ。

母の墓を訪ねた後のことである。間もなくしてアリョーシャは、父に修道院入りの許可を求め、僧院でも自分を「見習い僧」として受け入れてくれる用意があると告げる。これを聞いたフョードルは、息子が既に修道院を訪ね、ゾシマ長老に心を動かされていたことを知っていたと語り、素直にその申し出を受け入れる。注目すべきは、これに続く場面である。修道院について、フョードルは例によってアリョーシャが耳を塞ぎたくなるような卑猥な話を聞かせる一方、ゾシマ長老については一切悪口雑言を浴びせることなく、むしろ自らの内なる空虚^{ニヒリズム}を次々と息子に語り出すのだ。以下にその一部を挙げておこう。彼の内に目覚めた「何か」、これが如何なるものであるのかを垣間見ることが出来るであろう。

「ちょうどいい機会だ。俺たち罪深い奴らのために祈ってくれないか？ 俺たちはこの世でずいぶん罪作りをして来たからな。俺は以前から常に考えていた。俺のような人間のために、そのうちに誰かが祈ってくれるものだろうか？ と。この世に

そんな人間がいるのだろうか?とな」

「あそこに行って、真理を探り当てたら、話しに帰ってこい」

「俺はお前だけが、俺を非難しなかった唯一の人間だと信じている」

(一四)

空虚と嘘の塊のような破廉恥漢フョードルが、「天使」たる息子のアリョーシャを前にして初めて打ち明けた魂の真実だと言えよう。この世界の何処かには、如何なる破廉恥漢や罪人さえをも赦し、そのために祈ってくれる存在が一人でもいる——後にスメルジャコフの熱弁と詭弁に触れたフョードルが、「ロシア的信仰」が現われ出た!と金切り声で騒ぎ立てる宗教的心情である(三七★)。しかしこれは決して酔っぱらった卑劣漢の一時的感激として葬り去られるべき言表ではない。我々はここで、「天使」アリョーシャを相手に「ロシア的信仰」を吐露するフョードルの魂の片隅にせよ、ゾシマ長老が「ロシア的信仰」と結びついて存在していたこと、彼はこの長老の許に「真理」を探り当てさせるべく息子を送り出そうとしていることを知らされるのだ。「ロシア的信仰」とは、スメルジャコフやフョードルやイワンのみならず、この後で見るように、ゾシマ長老やアリョーシャをも含めて、この作品の主人公たちの心の底に存在する根本的宗教的心情なのである。

★次の[5]で少年ゾシマの心に及ぼした『ヨブ記』の影響を見た後、[6]でスメルジャコフの聖書知識と信について、また彼が生きる「闇」について考えるために、ここでスメルジャコフが「ロシア的信仰」について語る場面(三七)を簡単に確認し、フョードルの言う「ロシア的信仰」についても確認をしておこう。

カラマーゾフ家の夕食後のことだ。召使のグレゴリーが、アジアの異郷で回教徒によって殺害されたロシアの正教徒の話を持ち出す。これに対して突然口を開き、異を唱えるのがスメルジャコフである。その熱弁・詭弁の詳細は省略しよう。彼は最後に、もし人に「芥種一粒ほどの信仰」がありさえすれば、山に海まで動くよう命じて回教徒を斥け、自らは棄教もせずに済むはずではないかと、グレゴリーに痛烈な揶揄を浴びせる。ところが福音書まで持ち出して純粋な信仰の可能性を説いたスメルジャコフが手の平を返すように、今の世には誰一人山を海に入らせ得る信仰を持つ人間など存在しないとした上で、更に次のように話を締め括るのだ——

「尤も、この全地球上に一人か多くても二人程度は、そんな人間もいるかも知れません。しかし例えそうだとすると、何処かエジプトの砂漠あたりで修行しているでしょうから、見つかりっこありません」(三七)。

紆余曲折の詭弁の果て、スメルジャコフが発したこの言葉を耳にするや、フョードルは熱に浮かされたように金切り声を上げる。「ちょっと待て!とすることは、山を動かせる人間が一人はいると言うことか。お前もやっぱ、そのような人間がいると思うのだな?」。スメルジャコフの尻尾を掴んだとばかりに、興奮したフョードルはアリョーシャとイワンに向かい、これは「ロシア的信仰」だと騒ぎ立てる。

イワンもアリョーシャも父に反論はせず、それなりの同意を与えるのだった。

「誠に汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に《此処より彼処に移れ》と言ふとも移らん」(マタイ十七 20)。運命の不条理と醜悪さへの嫌悪と復讐の炎を内に燃やすスメルジャコフが、聖書知識を自在に使いこなし、また「ロシア的信仰」を内に秘め、その心を究極何処に向けてゆくのか? ——『カラマーゾフの兄弟』の「ブラック・ホール」たるこの若者については、本論の最後[6]で改めて考えるのだが、『カラマーゾフの兄弟』の「光」を求めて、今回アリョーシャからゾシマ長老に向けて、その信の在り方を辿りつつある我々の道筋には、イワンと共にスメルジャコフが生きる深い「闇」の存在することも忘れてはならないだろう。その「闇」の底で彼等もまた聖書に向かい、イエスと神を見つめ、人間と世界とその歴史の究極が「光」であるのか、或いは「闇」でしかないのかを命を賭けて問い続ける存在なのである。

斯くして修道院のゾシマ長老の下で、アリョーシャの修業が始まる。

[4]. 故郷・「家畜追込町」で(2)

— ゾシマ長老との出会い —

筆者はゾシマ長老について記すにあたり(一5)、まずはロシアの「長老制度」の説明を試みる。しかし「長老制度」については、本論冒頭の[1]「ゾシマ長老に関する基礎データ」の2番目と4番目に関して説明をしたように、「修道院」に関するゾシマの考えと併せて検討する方がよく、我々はこれら二つを別の機会に取り上げる予定である。今はまず、モスクワに於けるアリョーシャの成長史を追って来た延長線上で、アリョーシャの目と心に映ったゾシマ像を確認してゆくことにしよう。

既に見たように、ゾシマ長老とアリョーシャとが実際に初めて出会うのは、彼の帰郷後のことである(一4)。だがそもそもの時点で、また如何にして、アリョーシャは長老のことを知ったのか? 筆者は具体的なことは何も記さない。だが「神と不死」を求めて出家を決意し、イエスに応え、「そこ[故郷]では《一切》[を与えているの]か? それともそこでも《二ループリ》[しか与えていないの]か?」という問いを抱えて故郷に帰ったアリョーシャである。この青年が「そこ」、つまり故郷の修道院に属し、しかもその許には「ロシア中から民衆が殺到する」聖者ゾシマについて、帰郷前に何も知らなかったとは考え難い。

兄のイワンの場合、モスクワで「神」を否定し、「キリストの愛」を斥け、自らを「全てが許される」「人神」としたこの青年は、故郷の修道院で「キリストの御姿」を守る高名な聖者ゾシマを視野に収め、彼との対決を胸に背水の陣で家畜追込町に帰郷した可能性が高い。事実、ゾシマ長老の許での「場違いな会合」を目論んだのは他ならぬイワンだと暴露するのは、他人の心の底を見抜く鋭利で辛辣な眼を持つ父フョードルである(二8)。だが

筆者はアリョーシャが故郷に帰還した理由の一つとして、故郷の修道院の思い出については指摘するものの、この修道院のゾシマ長老については何の言及もしない。この青年が帰郷後に母の墓を訪ね、その後訪れた修道院でゾシマ長老と如何なる出会いをしたのかについても、筆者の具体的な説明はない。我々もこれ以上の推測は止めよう。

しかし筆者は「見習い僧」として修道院入りを認められたアリョーシャが、その後ゾシマ長老の草庵に住むことを許されるまでに目をかけられるに至ったことを記し、殊に彼がゾシマ長老に対して熱烈な尊敬と讃嘆の炎を燃やし続けたことを強調する(一五)。長老に向けるこの尊敬と讃嘆の炎が生む問題については、この後で詳しく検討しよう。

筆者は更に、アリョーシャが僧服を身に着けてはいたものの、何処でも自由に歩き回ることを許されていたとし、この「見習い僧」の姿を町で見かけた人々が、彼のことを如何に見ていたかについても、我々読者に少なからぬ情報を提供する——アリョーシャが少年たちの投石合戦に巻き込まれた時である。この少年たちは日頃僧服を着て街を歩くアリョーシャを見て、カラマーゾフ家の息子の一人だとハッキリと認識していたことを告げるであろう(四三)。中でも少年コーリヤは、後にアリョーシャとの出会いを果たした時、アリョーシャが「修道院」にいて「神秘家」であることを知っていたと告げ、この青年に抱いていた強い憧れの心を表明するであろう(十七)。更にグルーシェニカである。彼女は自分を騙して捨てた男と世界への復讐心を燃やし続ける一方、アリョーシャの姿を町で見かけるや、この青年を自分の「良心」として眩しく眺めていたことを告げるであろう(七三)。「見習い僧」アリョーシャの姿を目にした人々、少なくとも純真な魂を持つ人々は、父フョードルと同じように、それぞれの内に「何か」を目覚めさせられずにはいなかったのだ。

ところが筆者は、アリョーシャが修道院に受け入れられてから一年近くが経ち、ゾシマ長老の死が近づくにつれて、この青年の内にはますます強く長老への尊敬と讃嘆の炎が燃え上がる一方、一つの危険な炎も宿されるに至ったことを指摘する。このことはゾシマ長老の死にあたって、アリョーシャが陥る絶望と「神の世界」の否定、そしてその絶望の底からの回心劇という『カラマーゾフの兄弟』の頂点の一つをなすドラマを理解する上で不可欠な「布石」と言うべきものであり、最大限に注意を払う必要があるだろう。以下では、これら‘pro et contra’、ゾシマ長老を巡るアリョーシャの二つの炎について見てゆこう。

アリョーシャの「炎」(1)

ゾシマ長老に対してアリョーシャが抱く熱烈な尊敬と讃嘆の炎。これを描く筆者の筆もこの上なく熱い。ロシア中からゾシマ長老を目掛けて殺到する人々、彼らが自らの抱える悩みを告白する前に、既にゾシマ長老は彼らの心の内を見抜いており、このことに人々は驚かされ、「脅え」に近い感情に捕らわれるのだった。筆者は、この光景を間近で見ていたアリョーシャの驚きと感激を次のように記す。

「アリョーシャは殆ど常に気づいていた。初めて面と向かい話をするために長老の

部屋を訪れる大部分の人が、入って行く時には恐れと不安の虜になっているのだが、出て来る時には大部分の場合、晴れ晴れとした嬉しそうな顔になっていて、どんなに暗い顔も幸せそうな顔に変わっているのだ。殊の外アリョーシャの心を打ったのは、長老が厳しいということは全くなく、それどころか彼の対応は殆ど常に陽気なものであったことだ。また修道僧たちは噂をしていた。長老は罪深い人たちに対してこそより愛情を覚え、最も罪深い人を誰よりも愛するのだ、と」

(一五)

ゾシマ長老に身近で触れていたアリョーシャの驚きと感動が生き活きと伝わって来る。「我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんと來たれり」(マルコ二 17)。修道院のゾシマ長老の下での一年、アリョーシャは師ゾシマを福音書のイエスと重ね、燃えるような感激の内に日々を過ごしたのであろう。

次に修道院での一年が過ぎて、『カラマーゾフの兄弟』のドラマが始まる時点のアリョーシャに焦点を移してみよう。まだ「駆け出しの博愛主義者」とされたアリョーシャが、師ゾシマ長老に対して抱く純真な尊敬と讃嘆の心、その炎は一年後も全く衰えることはなかった。筆者は、民衆のゾシマ長老に対する熱狂を目の当たりにするとアリョーシャの心は震え、全身が輝き渡るかのように感じられたとして、次のように記す。

「一体どうして信者たちがかくも長老を慕い、顔を拝んだだけで、どうして彼の前にひれ伏して感涙にむせぶのか —— そんなことはアリョーシャにとって何ら問題とはならなかった。そうだ、労働と悲しみと、そして何よりも日頃の不公正と、自分自身の罪ばかりか世界の罪によっても常に苦しめられているロシア民衆の穏やかな魂にとって、聖物なり聖者なりを見出し、その前にひれ伏し、礼拝する以上の慰めや欲求など存在しないことを、アリョーシャは良く知っていたのだ」

(一五)

ロシア全土から殺到し、自らの苦しみに対する長老の慰めの言葉を乞う数知れぬ民衆を目の当たりにし、この一年間「リアリスト」としてのアリョーシャは、ロシア社会の現実とロシア民衆の心とに対する理解をますます深めていったのだ。それと同時に、ゾシマ長老が体現する聖性への信は、この青年の内でも更に揺るぎないものになっていったのである。続いて筆者はアリョーシャが、民衆が「真理」について心の奥深くに宿す信念、地上の罪悪や不正に代わる「真理」到来への信仰についても深く知るに至ったとして、こう記す。

「《たとえ我々には罪悪や不正や誘惑があるとしても、それでもなおこの地上の何処かには聖なる至高の方がおいでになるのだ。我々の代わりに、その方の所には真理が存在し、その方が代わりに真理を知っておいでなのだ。つまり真理はこの地上で滅びることはないものであり、従って、神様が約束されたように、いつしか真理が我々の許にやって来て、全地上に君臨することになるであろう》—— 彼は民

衆がまさしくこのように感じ、かつ判断さえしていることも知っていたのである」
(一五)

これが先に見た「ロシア的信仰」に他ならず、この「ロシア的信仰」こそが、著者が言うあの「魂から突然湧き上がり、アリョーシャを何か新しい未知の、しかし既に逃げようのない道へと引っ張って行ったもの」に他ならず、彼をしてイエスの呼び声に応えさせ、「この地上の何処かに」存在するはずの「聖なる至高の人」を求める旅に出させたものだと言えるであろう。しかもこの青年は、直ちに他ならぬ故郷の修道院の内にその「人」を見出し、この「聖なる至高の人」ゾシマ長老の下で修業することを認められ、更にはその人の草庵に住まうことまで許されたのだ。そして今やこの「ロシア的信仰」が、アリョーシャが自らの内に抱く、神に対する、イエス・キリストに対する、そしてロシア民衆とゾシマ長老に対する、熱烈な信と愛の源泉となったのである。その喜びと感激の炎を燃やしつつ、彼は修道院での修行の一年を過ごしたのだ(★)。

★「成長史」の角度から言えば、アリョーシャの「ロシア的信仰」は、当初はその心の内に未だ胚芽として宿されていたものが、ゾシマ長老との出会いによって自覚化され、かつそれが民衆の心深くにも宿されることを目の当たりで知るに至り、彼はその喜びと感激の炎の内に修道院で一年間の修行生活を送ったと言えるであろう。

先に見たように、息子のアリョーシャを修道院に送り出すにあたって、父フォードルもまた心の内に宿す「ロシア的信仰」を素直に吐露したこと、そして彼はスメルジャコフの内にもこの「ロシア的信仰」が潜んでいることを知って大騒ぎをしたこと—— これらも、この作品を理解する上で忘れてはならない事実であろう。

更に言えば、この「ロシア的信仰」を強く心に宿すと共に、これを逆手に取る「叛逆」の思想青年がイワンである。イワンは、民衆が生来の弱さと愚かさ故に、彼らが本来求める「聖なる至高の人」イエス・キリストに代わり、偽りの支配者「大審問官」に魂を譲り渡して奴隷となり、「天上のパン」に代わって「地上のパン」に満足するという歴史的現実を鋭く暴き出すのだ。「ロシア的信仰」が『カラマーゾフの兄弟』を貫く主要な思想的縦糸の一つであることを改めて確認しておこう。

アリョーシャの「炎」(2)

ところが筆者は、アリョーシャの内なる炎が更に燃え上がると同時に、こここのところ新たに何か別の炎も生まれていたとするのである。

「こここのところずっと彼の心の内では、何か深い炎の如き歓喜がますます燃え盛っていた。彼の前ではこの長老もやはり一人の人間であることなど、少しも彼を困惑させなかった。《[長老が「聖なる至高の人」であっても、万人と同じ「一人の人間」であっても]同じことではないか。長老は聖なる方で、その心の中には万人にとって

の更生の秘密と、最終的にこの地上に真理を打ち立てる力とが宿されているのだ。やがて万人が聖なる人間となり、互いに愛し合うようになり、金持ちも貧乏人も、偉い人間も虐げられた人間もいなくなり、万人が神の子となり、真のキリストの王国が訪れるだろう」。こうアリョーシャは、心の中で思い描いていた」

(一五)

いよいよゾシマ長老の死が間もなくに迫るや、アリョーシャは師ゾシマもまた「一人の人間」でしかないことを忘れ、その心の内に燃やし続けて来た「ロシア的信仰」の「深い炎の如き歓喜」の中に、「聖者」ゾシマがもたらすであろう「奇跡」を熱望するという異質な「炎の如き歓喜」を混入してしまったのだ。つまりこの青年は師ゾシマを「メシア」と見なし、至高の聖者ゾシマがもたらすであろう黙示録的終末を夢想するに至ったのである。

「そのような[長老を愛する多くの]人たちは、公然とストレートに口には出さなかったものの、長老は聖者であり、このことに最早疑いの余地はないと言い切り、間近に迫った長老の死に関しては、その死後直ちに何らかの奇跡が起こり、ごく近い内にこの修道院に大変な栄誉がもたらされることを無条件に信じていたのだ」

(一五)

思い起こすべきは、筆者がモスクワ時代のアリョーシャを紹介する際、その性格規定を様々に記す中で、アリョーシャが「リアリスト」であるとしていたことである。真の「リアリスト」にあっては「奇跡が信を生む」のではなく、逆に「信が奇跡を生む」のだ。まだ「駆け出しの博愛主義者」アリョーシャの成長史を描こうとする筆者は、故郷の修道院で出会ったゾシマ長老の下で、この青年が修行を積んで宗教的認識を深め、「神と不死」に関する真の「リアリスト」となり遂げる前に、ゾシマ長老の死と共に、早くも大きな陥穽に陥ろうとしていることを告げているのだ。「彼は既に自分の師の精神の力を完全に信じており、長老の名声は自分自身の勝利のようなものであった」(一五)。「聖者」ゾシマの「力」と「勝利」に対する勝ち誇ったような歓喜。だが筆者によれば、これは性急な「メシア待望」の燃え上がりでしかなく、未熟な信の高揚と言うべきものでしかないのだ。

ここでフォードルに戻ろう。筆者は、息子を修道院のゾシマ長老の許に送り出す父フォードルに、先に引用した言葉の前後で、更に次のようにも言わせているのだ。

「行って、向こうで真理を探り当てたら、話しに帰ってこい。いずれにせよ、地獄がどんなものか確かに探り当てたら、話しに帰ってこい。(略)。お前の判断力は悪魔に食われていない。勢いよく燃え盛って、火が消えて迷いが覚めたら、帰ってこい。俺は待っている」

(一四)

酔っ払いの卑劣漢たるフォードルはこの時、息子がゾシマ長老に対して燃やす尊敬と讃嘆の炎が「迷い」をも宿す脆くはかない炎であること、息子とその熱狂の内にやがてその

「判断力を悪魔に食われて」しまい、「地獄」に落とされ兼ねない危険な旅に出ようとしていることを、既に一年前に遠く予感していたと言うべきであろう。父フョードルこそが、辛辣でしたたかな「リアリスト」だったのだ。

アリョーシャの「大きな成長史」は、長老の死を巡るスキャンダルと、その絶望の底で彼が体験する一連の回心劇として、第六篇で見事な展開と完結を迎えるであろう(★)。

★アリョーシャの「大きな成長史」に於ける頂点、ゾシマ長老の死と共に、この青年が直ちに信の試練の内に投げ込まれ、その絶望の底から何重にもわたる回心劇を体験させられるドラマについては、やがて本論でも取り上げるが、取り敢えずは拙著『カラマーゾフの兄弟論』(後篇VIA「アリョーシャ」)を参照されたい。

我々はこの辺でアリョーシャの「成長史」を離れてゾシマ長老に目を転じ、ゾシマの少年時代の教会体験を確認しよう。そもそも「ゾシマ伝」とは、アリョーシャが故郷の家畜追込町で味わった様々な試練を基に、人間の心に臨む「活きた神」と「キリストの愛」のリアリティを、改めて師ゾシマ長老の生と死を通して思索し、記録に留めて置こうとしたものだと言えるであろう(★)。今回我々は、このアリョーシャの小から大にかけての「成長史」を辿ってきたのだが、最後に彼自身の手になる「ゾシマ伝」に於いて、師ゾシマの少年時代、その「小さな成長史」に於ける一齣、つまり彼の教会体験を確認したい。ここから浮かび上がって来るのは、師弟を通して描かれた人間の宗教的認識と覚醒のドラマであり、これこそドストエフスキイが、『カラマーゾフの兄弟』全編を通して描こうとした聖なる系譜であり、その思想的中心軸であると思われる。

★アリョーシャが編纂した「ゾシマ伝」を「第五福音書」とする視点については、拙論「ドストエフスキイに於けるイエス像」を参照されたい(大貫隆・佐藤研編『イエス研究史』所載、日本基督教出版局、1998)。

[5]. 『ヨブ記』に書かれていたこと

— 少年ゾシマの教会体験 —

上に記したように、ゾシマ長老の死後アリョーシャは「今は亡きゾシマ長老の生涯」(「ゾシマ伝」)を編纂する。そしてこの小冊子の冒頭には、ゾシマが九歳の時に故郷で体験した八歳年上の兄マルケルの思い出と、続いてその前年に彼自身が教会で与えられた体験の思い出とが続いて記されている(六2B)。前者は兄マルケルが死を前にして、この世界が「楽園(ライ)」であることに豁然と目覚める体験であり、そのドラマチックさ故に多くの読者の注意を惹きつけて来た。その陰に隠れて後者の思い出、少年ゾシマの教会体験の方はとかく看過されがちだが、兄の覚醒体験に劣らず極めて重大なゾシマの覚醒体験の報告であり、

今回はこれに焦点を絞って検討をしておきたい。兄弟の体験は、これから繰り返し扱おう。

ところでゾシマの思い出には夕日の斜光や母親が登場し、幼いアリョーシャの故郷での体験、つまり夕日の斜光を浴びて母親が泣きじゃくりながら息子を祭壇の聖母像に捧げていた光景と、多くの点で響き合うものがあるのだが、これら師弟に於いて、幼い頃の宗教意識の目覚めの全てが夕日や母親によってもたらされたと考えるのは行き過ぎであろう。だが少なくとも母親が彼等の「小さな成長史」で大きな役割を果たしたことは事実であり、このことは『カラマーゾフの兄弟』ばかりか、ドストエフスキ自身に於ける母親と聖母マリアの意味を考える上でも、看過出来ない事実として心に留めて置くべきであろう。



ドストエフスキの書斎

スターラヤ・ルッサの別荘、1881年

ゾシマが八歳の時、兄マルケルが死ぬ前年のことである。受難週の月曜日、母に連れられて教会の礼拝式に行った少年ゾシマは、ここで決定的な「魂の啓示」を与えられる。つまり彼は「生まれて初めて、神の言葉の最初の種子を意識して魂の中に受け容れる」のだ。—— 香炉から立ち昇る煙。円天井の細い小窓を通して射し込む「神の光」。地と天とが一つに溶け合う光景。これに見入る内に、一冊の大きな分厚い本を捧げ持ち、経机のところに進み出た少年が、その本を経机の上に置いて読み始める。その時「突然、私は初めて何かを悟った。人生で初めて、神の教会で何が読まれているのかを悟ったのだ」。

少年が朗読していたのは『ヨブ記』であった。「聖なる僕」ヨブをめぐる神と悪魔の戦い。悪魔の挑戦に応じて、神はヨブを悪魔の試練に指し出したのだ。打ち続く筆舌に尽くし難い苦難。受け入れ難い理不尽な苦難と苦悩、そして絶望。その底からヨブは叫ぶ。

「我裸にて母の胎を出たり。又裸にて彼處に歸らん。

エホバ與へエホバ取たまふなり。エホバの御名は讚むべきかな

(ヨブ一 21)

一切の希望を断たれた絶望の底から、ヨブは神への絶対の信と讚美を叫んだのだ。

『ヨブ記』はこの信と讚美の叫びに続けて、なお次々と襲い来たる筆舌に尽くし難い苦難の中で、ヨブが激しい神への懷疑と抗議の叫びを上げたことを記す。神の究極絶対の義を巡る激烈な論争が続けられる。しかしその最後に記されるのは、ヨブの神への信と讚美への立ち帰りである。「この本にはどれだけ多くの偉大で、神秘的で、想像し難いものが含まれていることか！」—— 幼いゾシマは、ヨブが言語道断の苦しみを与えられたのは、苦しみの底から彼がただただ神への信と讚美を叫ぶためであったことを知ったのだ。つまり神が与え、神が奪うという事実そのものが、神の創造の行為に他ならないこと、そして人間の生の一切はこの神の創造を讚美するためにあるということを、少年ゾシマは悟ったのである。一見すると全くの不合理で理不尽この上ない逆説。「だが」とゾシマは言う。

「ここに謎があることに、即ち地上の移ろいゆく相貌と永遠の真理とがここで共に触れ合うことに、正に偉大なるものが存在するのだ」

(六 2 B)

神の「永遠の真理」がこの地上の人間世界に降り立つ時、それは人間にとっては全くの「謎」として、「矛盾」として、そして「逆説」としてしか映らないこと。だがその苦しみがそのまま喜びの源に他ならないこと。そして教会とはこの逆説的真理を保ち伝え、神に讚美と祈りを捧げる場としてあること。受難週の月曜日、教会の礼拝式で八歳のゾシマが与えられた「魂の啓示」とは、『カラマーゾフの兄弟』を貫く「一粒の麦」の死の逆説とそのまま連なる、究極の宗教的逆説的真理の認識だったのである(★)。『カラマーゾフの兄弟』の「光」を求める我々の作業は、今回アリョーシャが紹介するこの少年ゾシマの教会体験を以って、取り敢えずの目標に至ったと考えたい。

★『カラマーゾフの兄弟』の核心をなす宗教的逆説 —— これについては、作品の冒頭・「エピグラム」として置かれたヨハネ福音書の「一粒の麦」の譬が何よりも雄弁に物語っている。この「一粒の麦」の譬が孕む逆説の考察は、河合文化教育研究所HPの「ドストエフスキイ研究会便り⑤-⑦」の中で、特に⑤に於いて詳細に論じた。

母に導かれた少年ゾシマの教会体験。そして母に抱かれた幼いアリョーシャの祭壇体験。前者には教会の円天井からの天来の光が、後者には祭壇を照らす夕日の斜光が、それぞれ幼い二人の心に射し込んでいたのであった。これら師と自分二人の幼児体験が互いに響き合う不思議、そしてその意味の深さに気づいたアリョーシャは、敢えて「ゾシマ伝」の正に冒頭にこのエピソードを置いたのであろう。アリョーシャが提示しようとしたのは、彼の師ゾシマの「小さな成長史」であると共に、「大きな成長史」の正に中核をなす逆説的真理でもあったのだ。この時アリョーシャの心を占めていたものとは、単に母に関する師弟二人の思い出の符合などではなく、母と息子を共に包み込む太陽の光であり、そして旧約の創世記から射し込む神来の光であり、更にはあのイエスの言葉から、ゾシマ長老を介し、彼自身へと響いて来る神の呼び声でもあったと考える時、彼の帰郷とゾシマ長老との出会いはその持つ本来のベクトルと奥行きを明らかにし、更には師弟の「成長史」を通して人間の宗教的認識の深化と覚醒のドラマを描こうとの、『カラマーゾフの兄弟』に臨むドストエフスキイの構成意図も鮮明に浮かび上がって来るであろう。

[6]. アリョーシャ、そしてスメルジャコフ

— 「光」と「闇」、極性の分裂への視野 —

『カラマーゾフの兄弟』に臨むドストエフスキイの構成意図、つまり人間の宗教的認識の深化と覚醒に向けた「成長史」のドラマを描くこと —— アリョーシャの場合、先に記したように([4])、その「大きな成長史」はゾシマ長老の死と共に最後の本格的な展開を見るであろう(第七篇)。そのドラマに対して、ドストエフスキイは筆者に周到な布石を打たせているのだった。つまり第一篇に於いて、師ゾシマ長老に対する尊敬と讃嘆のいや増しに燃え盛る炎について記す筆者は、この炎が「見習い僧」アリョーシャを、いつの間にか「リアリスト」たる彼本来の信から離れさせ、他の多くの人々と同じく、長老の死が引き起こすであろう奇跡への熱い期待の内に投げ込んでしまったと記すのだ。聖者ゾシマに対してまだ「駆け出しの博愛主義者」が抱いた、この上なく純真で熱烈な期待と夢ではあるものの、同時にそれは余りにも未熟で性急な「メシア待望」と言うべきものだったのである。

この試練の底から起ち上がったアリョーシャが、イエスとゾシマ長老から託された「実行的な愛」の精神を以って新たに向き合うのが、家畜追込町に生きる「罪なくして涙する幼な子」たちである。本論では最後にその「罪なくして涙する幼な子」たちの一人、スメ

ルジャコフに目を向けておこう。彼こそが、カラマーゾフの兄弟たちの中で誰よりも過酷な運命を与えられた存在であり、アリョーシャが求め、かつ体現する「光」から最も遠い「闇」の内に生きることを強いられた悲劇の人と考えられるのである(★)。

★『カラマーゾフの兄弟』に於ける「ブラック・ホール」とも言うべき存在スメルジャコフについては、以下二つの拙論を参照されたい。

1. 「カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡って —」

(「ドストエフスキイ研究会便り」(8)-(13)、2018)

『カラマーゾフの兄弟』の主要登場人物を、スメルジャコフとの関係性を中心に追い、この作品に於ける「罪なくして涙する幼な子」の代表たるスメルジャコフの死からの復活の可能性について考察したもの。

2. 「カラマーゾフの兄弟、そしてスメルジャコフ」

(「ドストエフスキイ研究会便り」(16)、2019)

スメルジャコフを考察する際、何がこの存在に向かうべき基本的姿勢か？ 何処を基本的テキストとすべきか？ — これらの提示を試みたもの。

ゾシマが八歳にして悟った真理、即ち『ヨブ記』が表わす神への信の逆説に戻ろう(前章[5])。我々はこの逆説こそ、作品の冒頭に置かれた「一粒の麦」の譬が示す逆説と共に、『カラマーゾフの兄弟』の思想的核心だと考えるのだが、ドストエフスキイはこの逆説をスメルジャコフ像の造型にあたってその根底に据えたと思われる。但し注意すべきだが、それはゾシマやアリョーシャに於ける場合とは逆の方向からである。即ちドストエフスキイは、運命の不条理と醜悪に対して強烈な嫌悪感と復讐心を内に燃やすスメルジャコフを、ゾシマやアリョーシャの「光」とは対極の「闇」の内に留め、師弟二人が生きる信の逆説を受け容れず、それを正面から拒否する人物として描くのだ。

この構図は何よりも、彼が恋人マリアに向かって発する懼るべき言葉から明らかとなる。

「私はせめてこの世に全く生まれ出ないで済むのだったら、[自らに]母親の胎内で自殺することを許したでしょうよ」

(五2)

偶然アリョーシャが立ち聞きしてしまう、懼るべき生への呪詛。ここから我々の心に直ちに思い浮かぶのは、あのヨブの叫びだ。

「何とて我は胎より死て出ざりしや。何とて胎より出し時に氣息たゑざりしや」

(ヨブ三11)

スメルジャコフの生への呪詛は、故なき苦しみの底からヨブが発したこの悲痛極まりない叫びとそのまま重ねられるであろう。だが視野を旧約世界から更に新約世界にまで広げ

る時、我々の前に立ち現われるのは、もう一つの懼るべき言葉である。マルコ福音書は、「最後の晩餐」の席、自分を売り渡したユダに対して、また間もなく自分を十字架の上に棄てて逃げ去ってゆくであろう弟子たちを前にして、イエスが次のように語ったと記す。

「然れど人の子を売る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを」
(マルコ十四 21)

旧約のヨブと新約のイエス。前者が表現するのは自らが投げ込まれた悲惨な生への嘆きと、そこに自分を投げ込んだ神への呪いと抗議であり、後者は自分を十字架に売り渡す弟子たちへの呪いと嘆き、そして憐れみである。スメルジャコフの呪いは、ヨブとイエスの言葉いずれにも劣らぬ悲痛さで我々の胸を打つ。旧約聖書も新約聖書も自家薬籠中のものとして使いこなすスメルジャコフが、これら二人の言葉を知らなかったとは思われない。むしろヨブとイエスの言葉を向こうに置き、「瞑想者」スメルジャコフは自らの運命について思いを凝らし、密かに呪いの刃を研ぎ澄ませていったと考えられる。このスメルジャコフの内に「測り知れない」「傷ついた自尊心」を見出したのはイワンである。しかし世の闇を何処までも追う彼でさえ、この「ブラック・ホール」の内で疼く傷を正面から直視し切れず、遂にはこの異母兄弟を疎ましく思い、彼から自らを遠ざけてしまうのだ(五六)。

筆者は直接マリアに向かって発せられたこの呪いの言葉が、育ての親グレゴリーイに対して、また祖国ロシアとロシア民衆に対して、外国人に対して、そしてカラマーゾフの兄弟たちに対して向けられたものであったと記す。だが我々は、更にそれがヨブと重ねて神に向けられた嘆きと呪いであり、またマルコが伝えるイエスの呪いと嘆きをそのまま受けた言葉であると共に、その憐れみの心に対する拒否と呪詛の言葉でもあると考える時、この青年の言葉が持つ懼ろしさと悲しさは最大限の強度と奥行きとを以って胸に迫るものとなるであろう。繰り返すが、スメルジャコフの聖書知識は並大抵のものではない。自らの運命の不条理と醜悪さに対する強烈な嫌悪感と復讐心を胸に、彼はその鋭利な頭脳を新旧約聖書に向け、遂には神とイエスに対してこの懼るべき呪いの言葉を投げつけるに至ったと考えても何らおかしくはないだろう。筆者がこのスメルジャコフの呪いの言葉をアリョーシャに立ち聞きさせていることも、もう一度記しておこう。

スメルジャコフが浮かび上がらせるのは、冒頭に記したように、『カラマーゾフの兄弟』を貫く「光と闇」、「信と不信」、そして「肯定と否定」という激しい極性の分裂である。そして前者の「光」を担うのはゾシマとアリョーシャ師弟であり、後者の「闇」を担うのが異母兄弟イワンとスメルジャコフである。この基本的構図の下に、作者ドストエフスキイが「光」と「闇」の両極を、それぞれの主人公たちのドラマを通して如何に描いたか、殊に「光」を如何に描いたかを追うことが、これからの我々の課題であることを再確認し、今回の考察を終えよう。(了)

次回ドストエフスキ研究会便り(27)について

★「ドストエフスキ研究会便り」は、最初から何度も記したように、今回の26回目から『カラマーゾフの兄弟』に於ける「光」とは何か？ その「光」をゾシマ長老とアリョーシャ師弟は如何に表現しているのか？ —— これらの問題について、じっくりと検討を続けてゆく予定です。

★今回は、まずモスクワに於けるアリョーシャの宗教的認識の深化と覚醒のドラマを、この青年の「小さな成長史」として辿ることで、故郷でのゾシマ長老との出会いから始まる「大きな成長史」への前史を確認し、そこからゾシマ長老の「光」へのアプローチを、彼の少年時代の思い出に即して図りました。またこれら師弟二人の「光」との対照で、スメルジャコフが生きる「闇」も確認したのでした。

★注目すべきは、ゾシマ長老とアリョーシャが共に見据える旧約のヨブと新約のイエス二人の存在です。今回はヨブを中心に扱いましたが、これら二人が筆舌に尽くし難い苦難、その生と死を通して証した「信の逆説」こそ、作品冒頭に置かれた「一粒の麦」の譬が示す逆説と共に、『カラマーゾフの兄弟』を貫く思想的核心であり、スメルジャコフの「闇」を照らす「光」が輝き出るのは正にここからだと思われます。

★皆さんも旧約・新約聖書と向き合い、ヨブやイエスと対峙し、『カラマーゾフの兄弟』が提示する「信の逆説」について、それへの賛否両方向での思索を試み、ドストエフスキと、またこの「研究会便り」との活きた対話を試みて頂きたいと思います。

★次回は改めてゾシマ長老の下で修業を積むアリョーシャが、この師の内に如何なる「光」を見出していたのか？ —— このことを修道院の長老の許を訪れた「信仰心の篤い女たち」・「信仰心の薄い婦人」と長老との対話の中に確認してゆきます。作品では第二篇の3章・4章にあたります。